

最上地方出土の瓦質土器について

～下大曾根遺跡と上野遺跡出土資料の比較～

はじめに

近年の発掘調査の増加に伴い、県内でも出土例が極端に少なかった最上地方の瓦質土器の資料が新出している。最上郡鮭川村の城館跡とされる上野遺跡と、平安時代から中世にわたる集落跡の下大曾根遺跡の両遺跡である。この二つの遺跡は、河川をはさんで近接する位置にある。(図1)

本稿では、両遺跡から出土した瓦質土器の遺物観察や器種構成を比較し、あわせて大和産瓦質土器にみられる特徴との差異を検討したい。これらを踏まえ、瓦質土器の技術系譜や遺跡の性格について若干ながら考察を行っていく。

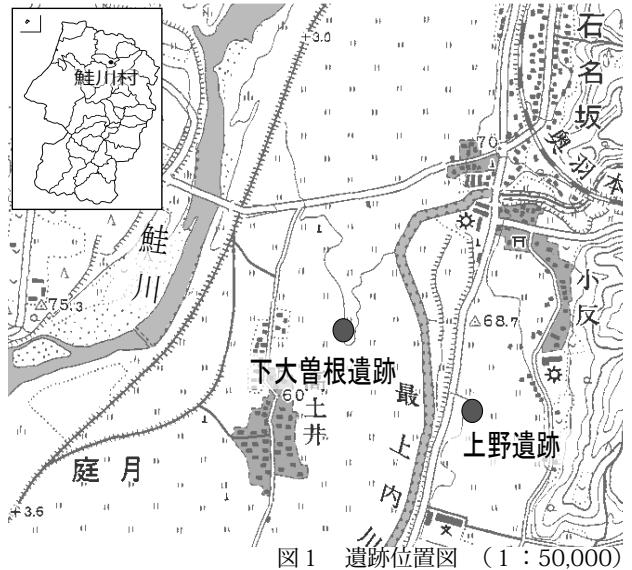
1 瓦質土器について

瓦質土器とは、表面に炭素を吸着させた瓦質焼成の土器で、煤けたような色調が特徴となる。また、前者と同じ器形で酸化炎焼成による土師質の製品も同類と捉えられる。

瓦質土器は、鎌倉末期の西日本を中心に出土する。器種は、壺・甕・鍋・釜・擂鉢などの煮沸・貯蔵・調理具や仏具の一部に見られる傾向がある。室町期には全国的な広がりをみせるが、16世紀頃から陶磁器類や金属器などに市場を奪われ、土師質焼成に転化させた特定の製品に器種を残すのみとなる。したがって、瓦質土器は、中世後期の代表的な生活具であるとともに、中世社会の様相を明らかにする重要な資料であると位置づけられる(鋤柄 1995)。

2 県内出土の瓦質土器

山形県内で、瓦質土器が出土する遺跡は40遺跡以上を数え、県全域に及んでいる。特に日本海に面する庄内地方と内陸部の最上川をはじめとする河川沿いで分布が知られる。県内の瓦質土器研究は、大和産と在地産の分類をはじめ、出土遺跡の分布と編年、瓦質擂鉢の系譜の問題が検討されている(高桑弘 2003)。また、瓦質擂鉢を含む特定の遺物群が出土する遺跡の分布状況から、



領主への従属度の高い工人集団が存在するのではないかと指摘されている。(高桑登 2003)

3 遺跡の概要

下大曾根遺跡は、最上郡鮭川村大字庭月に所在し、西側を流れる鮭川と、東側の最上内川による自然堤防上に営まれた平安時代から中世の遺跡である。県営ほ場整備事業に伴い、平成21年度に発掘調査が実施された。調査の結果、竪穴建物跡をはじめ、土坑、溝跡、井戸跡が確認され、平安時代の赤焼土器や須恵器、青磁碗や白磁皿など中世の遺物も出土している。土坑や井戸跡からは、瓦質土器が6点出土している。いずれも擂鉢(以後瓦質擂鉢)であり、前述した瓦質焼成と土師質焼成の両方が確認されている。(図2)

上野遺跡は、下大曾根遺跡より東に約1km離れた最上内川左岸の段丘に位置する中世の城館跡で、平成14年度に発掘調査が実施されている。遺跡は、外側を小規模な堀で囲うのみで、戦時に備えた遺構は認められない。内側からは、多数の建物跡と一緒に石敷遺構や石組の池跡が確認されている。出土遺物は懸仏や鏡、硯、碁石等のほかに、瓦質土器や陶磁器類がある。石組の池跡や出土遺物の様相から、庭園を有する中世の館跡であると考えられている。出土した瓦質土器は、茶湯を沸かすための風炉が主体を占め、他に擂鉢が単体で出土している。(図3)

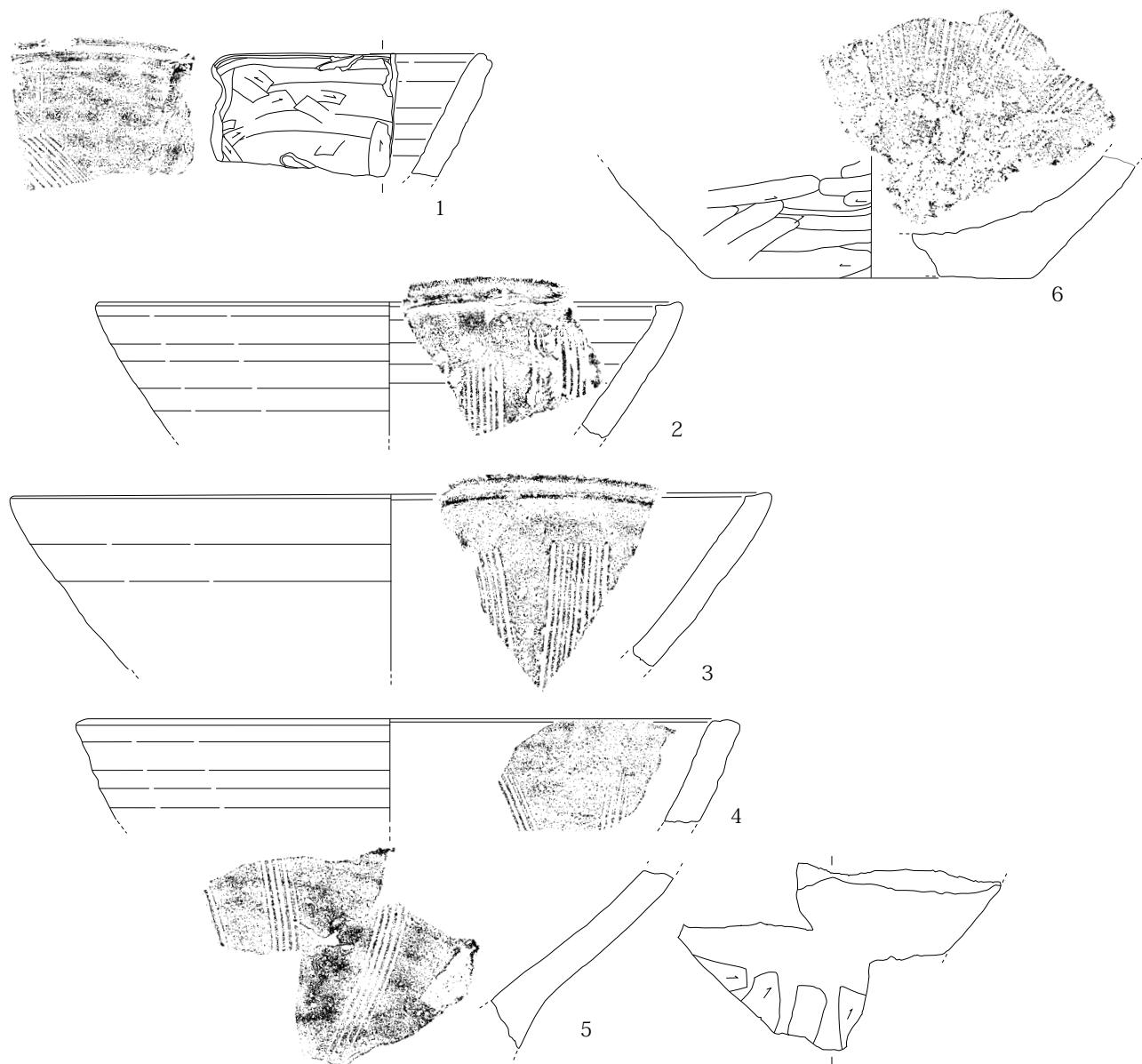


図2 下大曾根遺跡出土 瓦質擂鉢

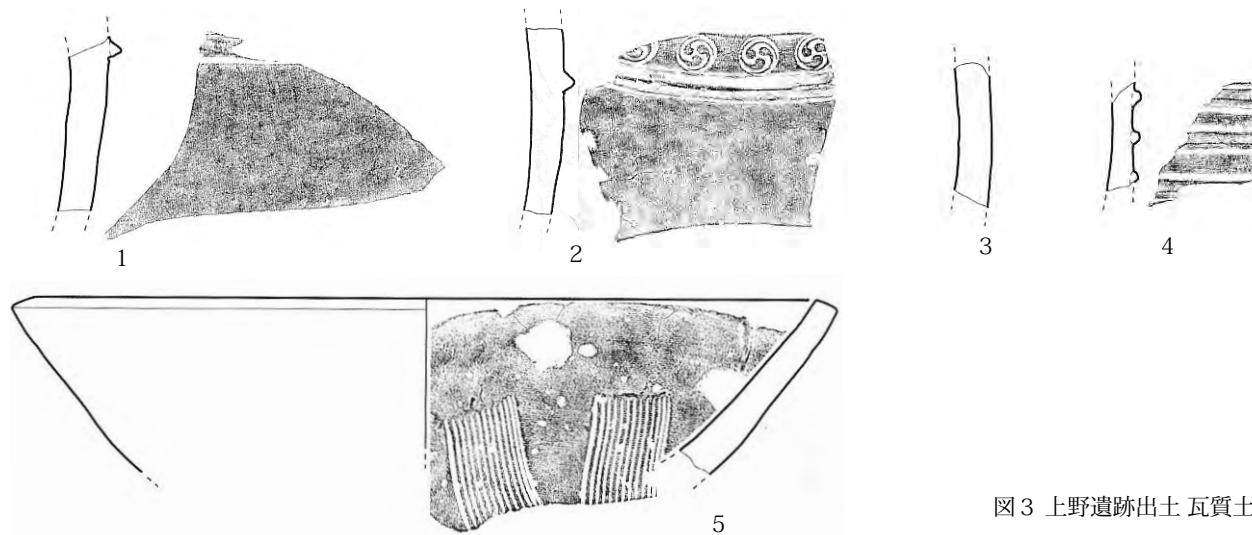


図3 上野遺跡出土 瓦質土器

0 5 cm
1 : 3

No	出土地点	器種	焼成	装飾など	調整技法	焼し	胎土	備考
下大曾根遺跡								
1	SE105 F 2	擂鉢	土師質	卸目20mmに8本	外面ヘラナデ	×	10YR 7/4に似、黄橙色 (石英少、雲母少、砂質)	口縁端部が方形を呈する。
2	SK134F1	擂鉢	瓦質or陶質	卸目13mmに5本	ロクロ整形	×	10YR 6/4に似、黄橙色 (石英少、白色粒少)	3と同一個体。瓷器系陶器の模倣か?
3	SK134F1	擂鉢	瓦質or陶質	卸目13mmに5本	外面ヘラ調整	×	10YR 6/4に似、黄橙色 (石英少、白色粒少)	2と同一個体。瓷器系陶器の模倣か?
5	SE102 RP43	擂鉢	瓦質 (サンドイッチ構造)	卸目26mmに10本	ロクロ整形	内外面 (良好)	2.5Y6/1灰白色 (石英少、白色粒少)	共伴遺物に瀬戸美濃産花瓶(瀬戸10期:1370~1400年)
6	K - 16	擂鉢	瓦質 (サンドイッチ構造)	卸目26mmに10本	ロクロ整形	内外面 (良好)	2.5Y6/1灰白色 (石英少、白色粒少)	
6	SE105 F 2	擂鉢	瓦質or陶質	卸目23mmに7本	底部調整不明 離れ砂不確認	全体	2.5Y2/1黒色 (石英少、黒色粒少)	瓷器系陶器の模倣か?
上野遺跡								
1	S P 13	風炉か	瓦質	外面に突帶	外面ミガキ 内面ナデ調整	内外面 (やや不良) (海面骨針少量、石英少、白色粒少)	2.5Y6/2灰黄色	外面の突帶貼り付け良好
2	S T 129	風炉	瓦質(一部、サンド イッチ構造)	外面に突帶 印花三巴文	外面ミガキ 内面ナデ調整	内外面 (良好) (良好)	10YR 7/2に似、黄橙色 (石英少、雲母少、海面骨針多)	外面の突帶貼り付けが雛
3	S D 11	風炉か	瓦質		外面ミガキ 内面ナデ調整	内外面 (良好) (良好)	2.5Y6/2灰黄色	
4	S P 41	風炉or火鉢	瓦質	外面に突帶3条	外面ナデ調整	内外面 (良好)	7.5Y7/1灰白色 (白色粒多)	外面の突帶貼り付け良好
5	S K 196	擂鉢	瓦質 (サンドイッチ構造)	卸目30mmに13本	ロクロ整形	内外面 (良好)	2.5Y6/1灰白色 (石英少、白色粒多)	

表1 遺物観察表

4 遺物について

両遺跡から出土した瓦質土器の特徴を表1に示した。分類は、風炉等が破片資料で全形を把握するに至らないものがあるため、器形が把握できる擂鉢に限った。瓦質擂鉢の分類には、高桑弘美氏の分類を用いた(図4)。以下に、各遺物について説明する。

下大曾根遺跡出土の瓦質土器は、いずれも擂鉢である(図2)。1は、片口を持つ土師質の擂鉢である。口縁端部が方形となるIII a類で、口縁端部の面には沈線が入る。外面にはヘラナデ調整が確認される。2・3は口縁部に面を持ち、内側へ低くなるIII類bである。瓦質焼成で内外面に燻しが施されている。4・5は、同じ遺構内から出土しており、同一の個体と思われる。燻しを施さず、色調は褐色であるが、焼成状況は良好で非常に硬質である。口縁部はIII類bに近似し、外面にはヘラナデ調整を施す。6は擂鉢の底部である。燻しによるのか、内外面はもちろん断面も黒色を呈している。

上野遺跡から出土した瓦質土器には、風炉および擂鉢の二種がある。風炉は内外面ともに燻し良好であり、外面にミガキ調整、内面をナデ調整としている。外面には、突帶の貼り付けやスタンプ文が施される。胎土は、灰白か灰黄色のチョーク質を基調とし、海面骨針を多く含むものが見受けられる。(図2 1~4)。擂鉢はIII類aに属する。白色粒を多く含むチョーク質の胎土で、内外面とも良好な燻しが施される。(図2-5)

瓦質擂鉢の年代は、各々の模倣陶器に後続する時期と考えられ、III類aは珠洲IV期(14世紀後半)、III類b



図4 瓦質擂鉢の分類図(高桑弘美 2003b より転載)

は珠洲V期(15世紀前半)に位置付けられる。(高桑2003b)。しかし、良好な一括資料に恵まれないことや、共伴遺物の検討なども踏まえて、慎重を期す必要がある。

5 大和産瓦質土器との比較

大和産の瓦質土器の特徴を以下に提示し、これを踏まえ、各々の瓦質土器について検証する。

<大和の瓦質土器の特徴>

- ① 燻 し: 基本的に黒色でムラが少ない。
- ② 焼 成: 灰白色・クリームがかった灰褐色。(断面形で中心が黒く、外側が灰白色を呈するサンドイッチ構造のものはない。
- ③ 胎 土: 精良で長石・石英の小片、微細なものを持む。角閃石や大きな雲母含まない。白色または灰白色で、チョーク質である。
- ④ 底部調整: 例外なく離れ砂(砂底)を使用する。



写真1 土器断面のから見る焼成状況

⑤ 調整技法：内面は縦方向の粗いヘラミガキ、口縁部付近は横方向、スタンプ部分は押印の後にヘラミガキをするが、スタンプを磨きつぶさないように避けている。

上に記した大和産瓦質土器の特徴と両遺跡出土のものを比較すると以下のようになる。

瓦質擂鉢では、表面の燻しが良好のものと燻しを施さないものが存在する。胎土観察からは、石英を多く含む点や、断面の中心部がサンドイッチ構造（写真1）を示すものが存在し、②・③を満たさない。また擂鉢の底部には、離れ砂の痕跡が認められず④を満たさない。

風炉については、胎土観察から海面骨針を多く含む点や個別的な幾つかの差異が見受けられるが、内外面の調整や突帯の貼り付け後のナデ調整など大和産のものと共通する点も見受けられる。

6 瓦質土器と遺跡の関係性

瓦質土器の器種構成において、両遺跡間でも差異が見受けられた。下大曾根遺跡では擂鉢のみの出土であったが、上野遺跡では風炉の出土が主体を占めている。この様相は、越後の出土遺跡例にも見受けられ、風炉や火鉢の出土遺跡の分析から、城館跡と村落遺跡で出土数に厳然とした差があることが明らかとなっている。特に風炉は、村落では認められず、国人領主の家臣や寺院の生活様式との関連が指摘される。すなわち、瓦質土器の器種構成からもある程度、遺跡の性格や階層性が窺えるよう

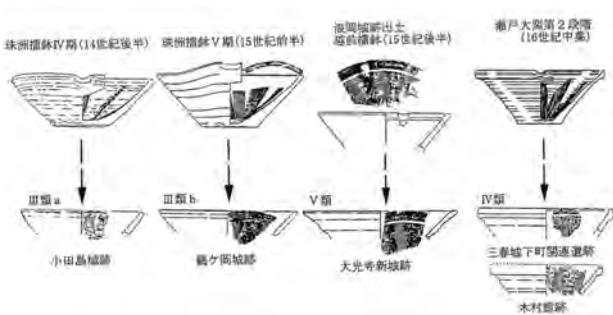


図5 陶器と瓦質擂鉢（高桑弘美 2003b）より転載

である。（水澤 1999、中土器研 2008）。

県内でも風炉出土の遺跡は、城館跡・寺院跡に多い傾向がある。しかし、戦時の備えである城館の性格上、日常雑器の擂鉢類が多く出土する城館もある。今回検討した上野遺跡は、石組の池など庭園を設えた館跡であり、戦時面の要素に乏しい。天目茶碗をはじめとする奢侈品と風炉が主体を占める様相からは、館跡が国人領主層によって営まれたと推測できる。

擂鉢は、分類したⅢ類aの擂鉢に、瓦質焼成（図3-5）と土師質焼成のもの（図2-1）が存在することから、珠洲IV期の早い時期から、擂鉢の在地生産が開始されていたと考えられる。

大和産瓦質土器との共通性については、風炉には、いくつか共通性が見受けられた。これは風炉がある程度広域に流通していたか、器種の規範性が高かったことがその要因と推測される。一方、擂鉢には大和産との共通性は薄く、比較的、在地的要素が強いように考えられる。

また、下大曾根遺跡出土の瓷器系陶器との関連性がみられる擂鉢（図2-4～6）についても、製作時期や技術系譜、共伴遺物などの検討が必要である。

本稿は、下大曾根遺跡の調査報告書執筆に際して行った資料比較検討時の成果を基としている。今後更なる検討を加え、本報告でまとめたいと考えている。

（山木 巧）

註1) 下大曾根遺跡発掘調査の資料比較検討のため、第27回中世土器研究会に参加した。会場にて、各地域の研究者の方々より遺物を実見して頂き、多大なるご教示を頂いた。ここに感謝を申し上げる。

引用参考文献

- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2006 『上野遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター第149集
 中世土器研究会 2008 『第27回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着－瓦質土器を考える（後編）－』
 鋤柄俊夫 1995 「10 瓦質土器－各地の瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
 高桑 登 2003 「奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号
 高桑 登 2007 「東北の瓦質土器」『第26回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着－瓦質土器を考える（前編）－』日本中世土器研究会
 高桑弘美 2003a 「5 瓦質土器」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
 高桑弘美 2003b 「山形県内出土の瓦質土器」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号
 水澤幸一 1999 「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第9集